

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル: The association between early formula and reduced risk of cow's milk allergy during the first three year of life: a Japanese cohort study

和文タイトル: 早期の粉ミルク摂取と3歳までの牛乳アレルギーのリスク減少の関連: 日本でのコホート研究

ユニットセンター(UC)等名: 福岡ユニットセンター
サブユニットセンター(SUC)名: 九州大学サブユニットセンター

発表雑誌名: Allergy, Asthma & Clinical Immunology
2022 年: DOI: 10.1186/s13223-022-00712-z

筆頭著者名: 碓 航太
所属 UC 名: 福岡ユニットセンター

目的: 私たちのグループが最近発表したエコチル調査の研究によると、3~6か月の乳児期早期の粉ミルク摂取は、1歳時の牛乳アレルギーの減少と関連していましたが、その長期的な経過はわかっていません。本研究では、この関連が1歳以降にどれぐらい長く続くのかを検証しました。

方法: エコチル調査に登録された子どものうち、3歳まで追跡された65,568人を対象としました。ばく露因子は、極早期(0~3か月)、早期(3~6か月)、後期(6~12か月)での粉ミルク摂取で、主要アウトカムは6、12、18、24、30、36か月時の牛乳アレルギーの罹患率としました。牛乳タンパクに対してアレルギー症状と感作があり、その評価時期に牛乳タンパクの摂取を制限しており、かつ医師が食物アレルギーと診断した場合に、「牛乳アレルギーあり」と定義しました。

結果: 牛乳アレルギーの罹患率は、月齢とともに増加を続け18か月には1.51%とピークに達し、以後は減少して36か月時には0.79%となりました。早期(3~6か月)の粉ミルク摂取は、生後3年間の牛乳アレルギーのリスク減少と関連していました。また早期の粉ミルク摂取と牛乳アレルギーの関連は、皮疹があってもなくても認められましたが、皮疹がある群で、より強く、またより長い期間観察されました。

考察(研究の限界を含める): 私たちの以前の研究では、子どもが極早期(0~3か月)よりむしろ、早期(3~6か月)に粉ミルクを摂取していると、12か月時の牛乳アレルギーのリスクの減少に関連することを示していましたが、今回の研究で、その関連が36か月まで続くことを示しました。ただし、診断に経口負荷試験が用いられていない、質問票から日々の哺乳状況が把握できない、多くの子どもが解析対象から外れバイアスが生じている可能性がある、などの制約があります。

結論: 本研究では、早期に粉ミルクを摂取している子どもは、生後3年間の牛乳アレルギーの罹患率が低かったことを示しました。もし粉ミルクが乳児期に開始されているのならば、それを継続する、あるいはヨーグルトなどの乳製品を摂取すると、牛乳アレルギーの減少に役立つ可能性があります。しかし、この研究の結果は、母乳の有用性を否定するものではありません。また、この結果を正しく解釈するためには無作為化比較試験が必要です。